

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（九）

— 48早蕨香／51浮舟香 —

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）、および同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二） 1桐壺香／6末摘花香」（『社会科学』第43巻第4号、二〇一四年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（三） 7紅葉賀香から12須磨香」（『社会科学』第44巻第1号、二〇一四年五月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（四） 13明石香／18松風香」（『社会科学』第44巻第2号、二〇一四年八月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（五） 19薄雲香／24胡蝶香」（『社会科学』第44巻第3号、二〇一四年十一月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（六） 25蛩香／30藤袴香」（『社会科学』第44巻第4号、二〇一五年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（七） 31真木柱香／40御法香」（『社会科学』第45巻第1号、二〇一五年八月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（八） 41幻香／47総角香」（『社会科学』第45巻第3号、二〇一五年十一月）の続編として、48早蕨香／51浮舟香までの四つの組香の翻刻と考察をおこなうものである。資料に関わる基本的な説明は

矢野環
岩坪健
福田智子

『社会科学』第43巻第3号を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、『同』第43巻第4号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「朱」と示し、一面の終わりには、〃〃を付して丁数を記す。考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第43巻第4号）を参照されたい。

一、巻末には影印を付す。

48 早蕨香

【翻刻】

△早蕨香

この春はたれにか見せんなき人の

かたみにつめる峯のさわらひ

一 十炷香の札を用。

一 うれしき浪の香一包、都の住居香二包。いはせの森香三包、

匂宮の香二包寄香、中君の香二包なり香、都合十包、出香とし、打

交一炷充焚出し、皆終て包紙を開くべし。」六五オ

一 都の住居の香斗り外に拵へ、試に出す。其外の香は試なし。

一 出香十炷、皆焚終て後に折居十を廻し順々に札を受て筆記

し点星を定むるべし。

一 札打様は

うれしき浪に 一の札 都の住居に 二の札

いはせの森に 三の札 匂宮に ウの札

中君に ナカノキミ 花一の札 六五ウ

一 記録点に正傍有り。左のごとし。

都の住居 何人間にても一点充、間違独は星二つ、二人

より星一つ充附る。是は試香を聞たるゆへ星

あり。

(うれしき浪

独聞三点、二人より二点充、間違星なし。

(いはせの森

点に正傍あり。正四点、傍三点充也。何人に

ても同し。傍二点にて正一点に対す也。間違

星なし。

正傍の定様色く有り。此組にて正傍とするは匂宮と中君

とは無試香二包充、故に香と札同銘異銘にても点をかくる

べし。香と札と同銘又異銘にても同香二炷」六六オに同札二

枚打たるは正の中と云。香と札と同銘異銘にても同香二炷

に別札を打たるを傍の中りと云。左例を以て考知べし。

たとへば

〔表〕 六六ウ

玉椿紋 (朱)

匂宮も中君も一炷充は聞たれとも、残一炷充、異名成る故に四炷ともに中れとも皆傍点也。

花葵紋 (朱)

匂宮二炷共に中君と聞たる故に正点也。中君一炷を匂宮と聞たる故に是は傍点也。

黄菊紋 (朱)

中君一炷は中君と聞たれども残一炷を匂宮と聞たる故に傍点也。

糸薄紋（朱）

匂宮を中君、又中君を匂宮と間違たれども、同香二炷共に同札を打たる故に正点に準る也。」六七〇

早蕨香之記

〔表〕 六七ウ

【考察】

(一) 竹幽本組香の方法

うれしき浪	1
都の住居	2コ
いはせの森	3
匂宮	2
中君	2
} 10	

* 本香には、「うれしき浪」の香一包、「都の住居」の香二包、「いはせの森」の香三包、「匂宮」の香二包（客香）、「中君」の香二包（ウ香）の計十包を出香する。試香を別途行うのは「都の住居」のみ。本香は一炷ずつ焚き、すべて焚き終わってから折居を十個廻して、順に十炷香札を打っていく。すべて打ち終わったら包紙を開き、正答を披露する。

五種類の香のうち、一炷のみ出た香は「うれしき浪」で「二」の札を、また、三炷出た香は「いはせの森」で「三」の札を打

つ。二炷出た香は「都の住居」「匂宮」「中君」のいずれかということになるが、そのうち「都の住居」は試香によって特定できる。残りの「匂宮」「中君」は、いわゆる無試香で特定できないため、二炷ずつの同香を聞き分け、それぞれ「ウ」の札二枚と「花一」「月一」の札とを打つ。

記録点として、「都の住居」は、何人聞き当てても一点ずつ加える一方、聞き違えると、一人だと星二つ、二人からは星一つを付す。試香があるため聞き分けるのは比較的容易と見て、聞き当てた時の得点は低く、また、聞き違えた時の減点が設定されている。「うれしき浪」と「いはせの森」は、独り聞きが三点、二人からは二点で、聞き違えても星は付かない。「匂宮」「中君」には「正傍（しょうぼう）」の点の習いがある。具体的な点の付け方は組香により様々であるが、本組香では、同香の二炷に同じ札（前述の「ウ」札二枚、あるいは、「花一」「月一」の札）を打てば「正の中（あたり）」として各四点、二炷で八点となる一方、同香二炷に別札を打った場合でも、「匂宮」「中君」に「ウ」「花一」「月一」のいずれかの札を打っていれば、「傍の中り」で各三点を得る。

蘭之園本は、「二」「二」の香、各二包（試香あり）と「中の君」の香四包（試香なし）の計八包を二炷聞きにするという、比較的簡素な構成である。ただし、聞き^{*}の名目を九つ用いており、

そのうち四つは竹幽本も香名として用いているが、残りの「さわらび」「つくし」「宇治を出る」「故郷の名残」「都へ出る」の五つは、竹幽本には見られない。竹幽本は、中君が宇治から都へと匂宮に迎えとられる当該巻の物語展開を、『源氏物語』中の語句に拠るといふよりはむしろ、「匂宮」「中君」の香に正傍の点の習いを採り入れるという組香そのものの趣向で表現したものと考えられる。

(2) 『源氏物語』との関わり

五つの名目のうち、「いはせの森」以外は蘭之園本にも見られる。「いはせの森」は奈良県生駒郡斑鳩町にある森で、「言はせ」を掛ける。蘭之園本と共通する名目のうち「うれしき浪」は、尾崎左永子氏『香道蘭之園』解説¹⁾が指摘するように、『源氏物語』では「うれしき瀬」である。竹幽本は蘭之園本をそのまま用いたか。

名目を使って当巻のあらすじを記すと次のようになる。なお名目には、傍線を付す。

父宮にも姉君にも先立たれた中の君は、宇治の山荘で喪に服していた。山里にも春は訪れ、山寺に住む知人の僧侶から、蕨などが贈られてきた。中の君がお礼に詠んだ和歌(⑤三四六頁)²⁾が、巻名歌である。

薫の手引きで匂宮と結ばれていた中の君は、都にある匂宮の

邸宅(都の住居)に引き取られることになった。匂宮はその引越しの準備について薫に相談し、薫もまた姉君を亡くした悲しみを匂宮に打ち明けたが、薫が中の君と話をした「いはせの森」(⑤三五二頁)の出来事は黙っていた。

中の君に仕える女房は、宇治から都へ引越すのを喜び、「うれしき瀬」(⑤三六二頁)に出会ったという和歌を詠んだ。しかし中の君は、父・姉と暮らした宇治を立ち去るのをつらく思っていた。

49 寄生香

【翻刻】

△寄生香

やとりきとおもひ出すはこのもの

たびねもいかにさびしからまし

一 十炷香の札を用ゆ。

一 夏の舎の香、木の本の香、旅寝の香、各三包充、寄生の香

なり客香一包、都合十包出香とし、五炷焚終て一同に包紙を開き、

六炷目よりは一炷充に包紙を開くべし。寄生の香を限とし

て香は終る也。」六八オ

一 地香外に拵へ試に出す。

一 地香九包打交、其内四包焚終て、残五包に寄生の香を加へ、

ら包紙を開き（前段）、六炷目からは一炷焚くたびに包紙を開いて正答を披露する（後段）。「寄生」の香が出たら、そこで香席を終える。なお、途中まで地香を焚いてから客香を加える場合、通常は、客香を加える直前で包紙をすべて開き、正答を披露してから客香を加えることが多い。その点、本組香は、地香四炷の後、客香を加えてから、さらに一炷を聞き、計五炷を聞き終えて包紙をすべて開くという手順になっており、きわめて珍しい。仮に、客香が、加えられた直後（五炷目）に出た場合、そこで香席は終了となり、後段は全くなってしまうことになる。

「寄生」の香は、「連座」（「連中」とも。連衆（れんじゅ）のこと）が所持している名香を、ひとり一炷ずつもらい受ける。偶然、同じ銘、同じ香木が提出されることがあれば、その人に事情を説明して香木を返却し、別香を所望してもよい。もらい受けた香木は、香主が自分の香を形状で見分けるのを避けるため、香木の縦横の寸法を揃え、また、同じ色に染めておく。香木を染めるのには、「染墨」と呼ばれる桐の木を焼いたものを用いる他、麻幹（麻殻。皮をはいだ麻の茎。おがら）の灰を用いてもよい。それを、地香と同様の紙で包み、包紙の奥の方に、見えないように香銘と香主の名乗を書き付けておく。こうして用意した香から一包を取り、「寄生」と名付けて本香に用いる。なお、

残った名香（連衆が十名だとすると、九炷残ることになる）は、香席を終えた後、香主に厚く御札を述べてから各人に返却する。札の打ち方^{*}について、地香は「夏の舎」「木の本」「旅寝」の香に、それぞれ「一」「二」「三」の札を打てばよい。また、「寄生」の香は、自分が所持している香と思えば「ウ」^{*}の札二枚、他者の香であれば「中の君」と称し、「ウ」の札を一枚打つ。

記録点は、自分の香である「寄生」の香が出て、かつそれを聞き当てた場合には四点を得るが、香主を聞き違えれば星三つとなる。また、自分の香でない「中の君」をそれと聞き当てた場合は二点、自分の香と聞き違えれば星一つである。客香と地香との聞き違いには、星を付けない。自分の香が出るかどうかは全くの偶然であるが、それを聞き当てることで、他者の香を聞き当てるよりも二倍の得点が得られる一方、聞き違えた場合は大きな減点となり、また、他者の香「中の君」を自分の香と聞き違えても減点となるなど、自分の香を他者の香と正しく聞き分けられるかどうか、ひとつの鍵になっている。なお、地香の得点は、聞き当てた人数に関わりなく一点ずつである。

蘭之園本は、「夏の舎」「木の本」「旅寝」の香各三包と、「中の君」の香一包（以上、試香あり）、「寄生」の香一包（試香なし）を用意し、「寄生」の香のみ「聞手」（竹幽本の本組香では「連座」「連中」所持の香木を一炷ずつ集め、その中から一包を

取って「寄生」と名付け、全十一包を一炷開きにするというものである。蘭之園本では、「中の君」が試香のある地香であるのに対し、竹幽本では他者の客香になっている。また、「寄生」の香について、「ウ」の札を二枚打ち、また、他者の香と聞き違えた場合に星を三つ付す点は、両者共通するが、蘭之園本が、「寄生」を聞き当てた人数によって得点に差をつける点は竹幽本と異なる。

(2) 『源氏物語』との関わり

名目は蘭之園本と同じで、五つある。そのうちの三つ（寄生・木の本・旅寝）は巻名歌（⑤四六二頁）に詠まれている。それ以外の名目のうち「中の君」は、宇治の山荘から都の匂宮邸に移り住んだ女君である。その姉君を薫は恋い慕い、姉君の死後も薫は宇治をよく訪れ、邸内の老木を見て、「かつて宿泊した思い出がなければ、この木の下の旅寝は、どんなに寂しいものとなっただろう」という巻名歌を詠んだ。薫は山荘に残った老女房から、中の君には浮舟という異母妹がいることを知らされる。残りの名目「夏の舎」は、『源氏物語』にも、またその梗概書である『源氏小鏡』³⁾にも見当たらない。『香道蘭之園』解説は、「その夏、はじめて浮舟と行き合った宇治山荘をいうか。」と指摘する。それは、薫が、宇治の山荘で初めて浮舟を垣間見て、亡き姉宮と生き写しであることを知り、思慕する場面である（⑤

四八七頁）。

50 東屋香

【翻刻】

△東屋香

さしとむるむくらやしけきあつま屋の

あまりほどふるあまそ、ぎかな

一名乗紙にて聞く也。

一 一二三四五の香、各二包充、都合十包の内、同香二包除け、

其跡に東屋の香^ウ也^包打交、以上九包出香とす^{地香外に拵、試に出す。客試なし。}九炷

皆焚終て包紙を開くべし。』七〇ウ

一 聞様は、九炷皆聞終て後に、地香の内、とり除たるは、何

香なりと聞分け、又東屋の香は何炷目に出たると聞て名乗

紙に書出す也。取除たる香には名目を認出す也。

其名目左のごとし。

一の香除たると聞は しげき律

二の香除たると聞は あまりほとふる

三の香除たると聞は 雨そ、き」七〇オ

四の香除たると聞ば 三条の旅所

五の香除たると聞ば とのゐ人

名乗紙認様、仮令一の香除たる時は

しげき律	除
あつまや	三炷目
名乗	

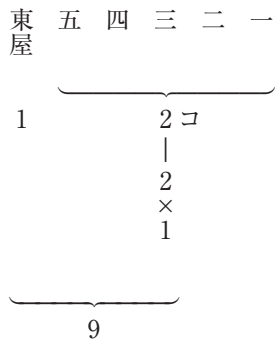
一 記録点は、客香何人にも二点充也。除香は一点充たるべし。書様左に記す。」七一ウ

東屋香之記

〔表〕七一オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本香には、「一」「二」「三」「四」「五」の香(地香)、各二包の、全十包のうち、同香の二包を除き、「東屋」の香(客香)一包を加え、全九包を出香する。このうち、地香五種類については、別途、試香を行う。「東屋」の香の試香はない。

九炷をすべて聞き終わってから名乗紙に答えを記す。答え方

は、まず、取り除いた地香はどれか、次に、「東屋」の香が何炷目に出たかをそれぞれ記す。取り除いた香は、名目により答える。すなわち、除いた香が「一」の香ならば「しげき律」「二」ならば「あまりほとふる」、「三」ならば「雨そ、き」、「四」ならば「三条の旅所」、「五」ならば「とのゐ人」と記す。

記録点は、客香を聞き当てた場合は、人数に関わらず二点、取り除いた香は一点である。

以上の竹幽本は、蘭之園本と全く同じ組香である。

(2) 『源氏物語』との関わり

六つの名目のうち「あづまや」と「雨そそぎ」「あまりほどふる」は巻名歌(⑥九一頁)にあり、「しげき律」もまた当該歌の「むぐらやしげき」に相当すると考えられる。

その他、「三条の旅所」は『源氏小鏡』にのみ見え、『源氏物語』では、浮舟の母が「三条わたり」に用意していた「小さき家」(⑥七七頁)が当てはまる。また、「とのゐ人」は『源氏物語』『源氏小鏡』いずれにも見え、「小さき家」を守る夜番の者を指す。

浮舟は異母姉の中の君と対面した際、中の君の夫である匂宮に言い寄られた。そこで浮舟は、三条の家に隠れ住むが、薫が訪れ、「律が茂って戸口を差し止めてしまったのだろうか。東屋の雨だれに濡れて、あまりにも長く待たされることよ」という

卷名歌を詠み、浮舟を宇治の山荘に連れて行った。

51 浮舟香

【翻刻】

△浮舟香

橘の小嶋は色もかはらじを

この浮舟そ行多しられぬ

一 薫大将方五人、兵部卿方五人と分つ薫方上。座方なり。

一 一の香、二の香、ウの香、各四包充、都合十二包打交、其

内より一包除け、残十一包出香とす地香に拵へ試みに出す。客は試みなし。

一出香十一包の内、二包取て浮舟と名付け、最初に一包充

と二ウ双方へ一炷開に焚出す。是を一組五人限りに聞て、札

を打、記録し、香の包紙を開見て、残九炷の出香を浮舟の

一の方にては一炷間に札打札筒一柱。毎に廻す。 浮舟の二の方にては二炷

聞にして札二枚充打折居二つ重て。二柱毎に廻す。 浮舟のウの方にては三炷間に

して、札三枚充打折居三つ重て。三柱毎に廻す。 二炷間の方にては、末に一炷餘

るを聞捨にするべし。もし又双方浮舟同香の時も、右の例

を以て、双方ともに同炷」七三オ聞にしてよし。後の九包、皆

焚終て、包紙を開くべし九柱の出香は連座。各々開する也。

一 記録に、浮舟の時は、中りたるを浮舟と朱にて認め、中ら

ざるは、札の数を認るべし。客地香の差別なく、独聞四点、

二人より三点充、聞違何人にも星二つ充附る。九炷の香は、客独聞三点、二人より二点充、地香独聞二点、二人より一点充、聞違星なし。都て中らぬは札銘の数を認るべし。」

七三ウ

一 札は一人前十二枚、十人分百廿枚也。

札表

十炷香の札紋に同し。

札裏

一 四枚 二 四枚 ウ 四枚

一 九炷出香に成て記録に認る。名目左のごとし。

へ(朱) 一炷間の名目」七四オ

一の香(朱) 薫の使 二の香(朱) 宮の使

ウの香(朱) あらはれ文

へ(朱) 二炷間名目

一一(朱) 薫の使 二二(朱) 宮の使

ウウ(朱) あらはれ文 一二(朱) 中の君

二一(朱) 六の君 一ウ(朱) 小野尼

ウ一(朱) 右近 ウ二(朱) 侍従

二ウ(朱) 常陸

へ(朱) 三炷間名目

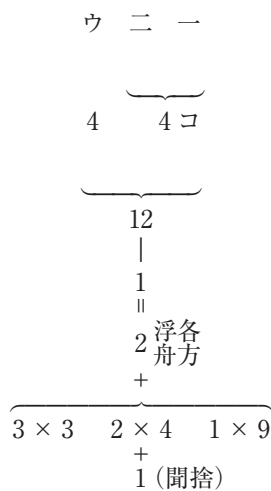
一一一(朱) 薫の使 二二二(朱) 宮の使」七四ウ

ウウウ (朱) あらわれ文	一二ウ (朱) まだ振ぬ
一二二 (朱) 君が為	二二ウ (朱) 深き心
ウウ一 (朱) 宇治橋	二ウ一 (朱) 永き契
一二一 (朱) 朽せじ	二ウ二 (朱) 年ふとも
ウ一ウ (朱) かわらん物	ウ一二 (朱) 橋の小嶋
一一ウ (朱) 峯の雪	二二一 (朱) 汀の水
ウウ二 (朱) 詠やる	一ウ二 (朱) そなたの空
	七五
オ	
一ウ一 (朱) 水まさる	二二二 (朱) 遠の里人
ウ二ウ (朱) 浪越る	二一ウ (朱) 末の松
一二二 (朱) 待らんとのみ	二ウウ (朱) 家作する
ウ一一 (朱) 障泥敷 <small>アブラリ</small>	ウ二一 (朱) 里びたる犬
一ウウ (朱) 九条わたり	二一一 (朱) 石山
ウ二二 (朱) 里の名	

一 記録書様左に記す。 七五ウ
 浮舟香之記 一除 (朱)
 「表」 七六オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、「二」「二」「ウ」の香を四包ずつ、計十二包を交ぜ、そこから一包を取り除き、残りの十一包を出香する。「一」「二」の地香のみ試香を行い、客香「ウ」の香に試香はない。答えには札を用いる。札の表は十炷香札と同じでよいが、札裏は「二」「二」「ウ」を各四枚、一人分十二枚を用意する。連衆は十人なので、百二十枚の札が必要である。

まず、連衆を五人ずつ、薫大将方と兵部卿方とに分ける。もちろん、前者が上座である。そして、出香する十一包のうち、二包を取って「浮舟」と名付け、双方に一包ずつ、一炷聞きに焚き出す。それぞれの連衆五人が、それぞれに焚き出された香を聞き、答えの札を打つ。その答えを記録した後、香の包紙を開いて正答を披露する。

その「浮舟」の正答の出方によって、残り九炷を何炷聞きに

するかが決まる。これは組香としてきわめて珍しく、まず他に例を見ない方法である。すなわち、「一」ならば一炷聞きで札筒を一炷ごとに廻し、「二」ならば二炷聞きで、折居を二つ重ねて二炷ごとに廻し、札を二枚ずつ打っていく。また、「ウ」ならば三炷聞きで、折居を三つ重ねて三炷ごとに廻し、札を三枚ずつ打つ。二炷聞きの場合、余った最後の一炷は聞捨にする。もし、薫大將方と兵部卿方の「浮舟」が同香であった時は同炷聞きにしてよく、札筒や折居の廻し方も同じでよいが、異香の場合は、それらが双方で異なってくるため、出香が複雑になる。「浮舟」の後の九包については、すべて焚き終わってから包紙を開いて正答を披露する。

点の付け方は、「浮舟」と後の九炷とで異なる。「浮舟」は、客香・地香の区別なく、独り聞きは四点、二人からは三点、聞き違えた場合は、何人でも星を二つ付す。一方、後の九炷は、客香の独り聞きが三点、二人からは二点、地香は独り聞きが二点、二人からは一点で、聞き違えても星は付さない。

記録のしかたは、聞き違えた場合はすべて札裏の「一」「二」「ウ」を記すが、聞き当てた場合は、聞きの名目を記す。すなわち、「浮舟」の場合、聞き当てると朱で「浮舟」と記す。また、後の九炷では、一炷聞きから三炷聞きまで、三種類の香の組み合わせにより、延べ三十九の名目が指示されている。

蘭之園本では、「一」「二」「三」の香（試香あり）と「ウ」の香（試香なし）を各三包、計十二包用意し、二包ずつ結び合わせて二炷聞きにするという組香になっている。「かほる方」「匂ふ宮方」（竹幽本では「兵部卿方」）に分かれるという点は竹幽本に通じる。だが、蘭之園本が、双方で聞きの名目の一部を別個に定めているにせよ、竹幽本は、初炷が異香である場合には、双方で何炷聞きかが異なることから、より複雑な趣向と言えよう。なお、蘭之園本独自の名目には、「絶せじを」「こだま」「浮船」の三つ（ただし竹幽本は「浮舟」を香名として使用）がある一方、竹幽本独自の名目には、「中の君」「六の君」「常陸」「まだ振ぬ」「君が為」「深き心」「朽せじ」「峯の雪」「汀の水」「詠やる」「そなたの空」「水まさる」「遠の里人」「石山」「里の名」の十五にのぼる。

（2）『源氏物語』との関わり

蘭之園本の名目は二十一ある。そのうちの十九は、竹幽本でも聞きの名目として用いる。残り二つのうち、「浮舟」は、前述のとおり竹幽本では香名として用いるが、一方「こだま」は、竹幽本には見えない。

「こだま」という語は、『源氏物語』の当該巻にいたため、『香道蘭之園』解説は、二巻後の手習の巻に出てくる「山彦」を指すと見ている。しかしながら、『源氏小鏡』浮舟の巻にある、行

き倒れになった浮舟には「木霊」（木に宿る靈魂）が取り憑いたのだという解釈に拠るものであろう。

蘭之園本・竹幽本いずれにも用いられる「小野尼」も、『香道蘭之園』解説が指摘するように、『源氏物語』では手習の巻に初めて登場するが、『源氏小鏡』では浮舟の巻で紹介される。『源氏小鏡』は他の巻の内容を記載することがあるため、この例も、『源氏物語』そのものではなく、『源氏小鏡』に拠ったと見られよう。同様に、「九条わたり」の「九条」は、『源氏物語』では他の巻にある語であるが、『源氏小鏡』では浮舟の巻に記される。ちなみに、『源氏物語』の当該巻では「下つ方」(⑥一六三頁)に当たる。その他、「薫の使」「宮の使」「あらはれ文」も『源氏物語』ではなく、『源氏小鏡』の「大将の使」「宮の御使」「あらはれし折の文」によると考えられ、また、「家作する」の「家作」も『源氏物語』では他の巻に見る語であるが、『源氏小鏡』の「殿つくりたまふ」によると推察される。

以上のように、蘭之園本の名目は『源氏小鏡』に基づくと推定され、その多くを竹幽本も継承したと考えられる。その一方で、竹幽本にのみある「中の君」「六の君」「常陸」は、それぞれ浮舟の異父姉、匂宮の正妻、浮舟の継父である常陸介を指し、浮舟をめぐるより詳細な人間関係が窺える。また「石山」も蘭之園本にない名目で、『源氏物語』当該巻に五例あり、王朝女性

に篤く信仰された石山寺を指す。

以下、名目をを用いて当該巻の概要を記す。

匂宮は、中の君に会いに来た浮舟を見て以来、心引かれていた。翌年の正月、薫によって宇治に連れて行かれた浮舟から、中の君の元に、次の和歌とともにお祝いの品が届く。

まだ古りぬものにはあれど君がため深き心にまつと知ら
なん(⑥一一二頁)

これを見た匂宮は、浮舟の歌ではないかと思ひ、薫の振りをして宇治を訪れた。浮舟は、匂宮とは知らず会ってしまう。しばらくして薫が尋ねてきたが、浮舟はもの思いにふけり涙に泣いている。薫は次の歌を詠み、浮舟を慰めた。

宇治橋の長き契りは朽ちせじを危ぶむかたに心騒ぐな(⑥
一四五頁)

匂宮は浮舟に夢中になり、再び宇治を訪れ、人目を気にせず語らうことができるように、近くにある家來の家に浮舟を連れ出した。宇治川を小舟で渡ったとき、橋の小島という中洲にさしかかり、匂宮は次の歌を詠み、浮舟は巻名歌で返した。

年経とも変はらむものか橘の小島の崎にちぎる心は（⑥）
一五一頁）

対岸の隠れ家で過ごしたとき、匂宮は思いを歌に託した。

峰の雪みぎはの氷踏みわけて君にぞ惑ふ道は惑はず（⑥）
一五四頁）

都に戻った匂宮は、長雨でなかなか宇治へ行くことができな
い苦しさを詠み、浮舟に送った。

ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへ暗るるころの
わびしさ（⑥一五七頁）

たまたま同じ日に、以下の和歌を記した薫の手紙も送られてき
た。

水まさる遠の里人いかならむ晴れぬながめにかきくらす
ころ（⑥一五九頁）

同時に二人の公達から手紙が届き、浮舟は悩んで次の歌を詠み、
手習いに書いた。

里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み
うき（⑥一六〇頁）

一方、薫の使と宮の使が出くわしたことにより、薫は三角関
係に初めて気づき、怒りの歌を浮舟に送った。

波こゆるころとも知らず末の松待つらむとのみ思ひける
かな（⑥一七六頁）

薫は匂宮が浮舟のもとに通うのを阻止するため、都に浮舟を
迎える「家作する」（⑥一六二頁）。それを知った匂宮も「九条
わたり」（「下つ方」⑥一六三頁）に家を準備する。

匂宮は薫よりも早く浮舟を引き取ることにして宇治を訪れた
が、今までとは違い番人が大勢おり、そのうえ「里びたる声し
たる犬」（⑥一九〇頁）に吠えられ近寄れない。これは匂宮を近
づけないために、薫が警固を厳しくしたためである。仕方なく
匂宮は浮舟の女房を外に呼び出し、匂宮は「障泥（馬具の名。鞍
の下から両側に垂らした泥除け）」といふものを敷きて」（⑥

一九〇頁）座り、引越しの相談をした。

二人の公達に言い寄られた浮舟に対して、浮舟の女房である右近は薫を、侍従は匂宮との縁談を勧めた。悩み苦しんだ浮舟は、ついに入水を決意して、こっそり家を出る。しかし川辺に倒れているところを小野の尼たち一行に発見され、一命を取り留める。浮舟が行き倒れになったのは木霊に取り憑かれたせいかと人々は考えた。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」(同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号25330403、いずれも平成25～27年度)における研究の一部である。

注

- (1) 薫遊舎校注『香道蘭之園』(増補改訂版、二〇一三年、淡交社)。
- (2) 以下、本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥(小学館、一九九四～一九九八年)により、その巻数と頁数を()を付して示す。なお、本文には、適宜手を加えた箇所がある。
- (3) 『源氏小鏡』の本文は、岩坪健『源氏小鏡』諸本集成(和泉書院、二〇〇五年)所収の第一系統第一類本による。蘭之園本

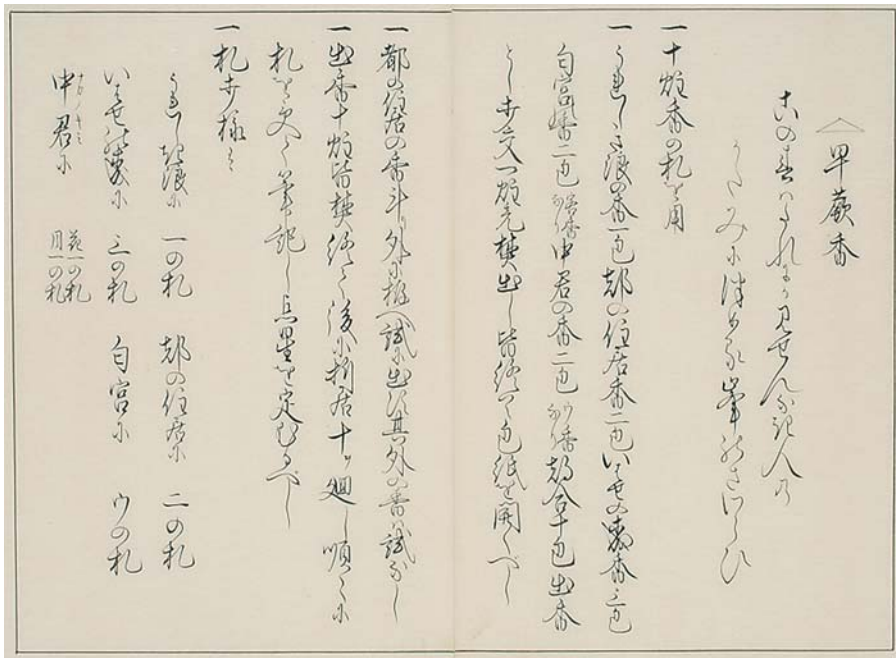
がその系統によることは、武居雅子氏が『源氏千種香』の依拠本を探る」(『総研大文化科学研究』9、二〇一三年三月)で論考された。

(4) 蘭之園本「絶せじを」。『源氏小鏡』第一系統第一類本「たえせしと」に依拠したと推察される。

(5) 竹幽本「そなたの空」。「雲」と「空」との字形の類似による誤写の可能性もあるが、当該歌の「そなたの雲」が「見えぬ」ほど「暗るる」「空」を表現した名目か。

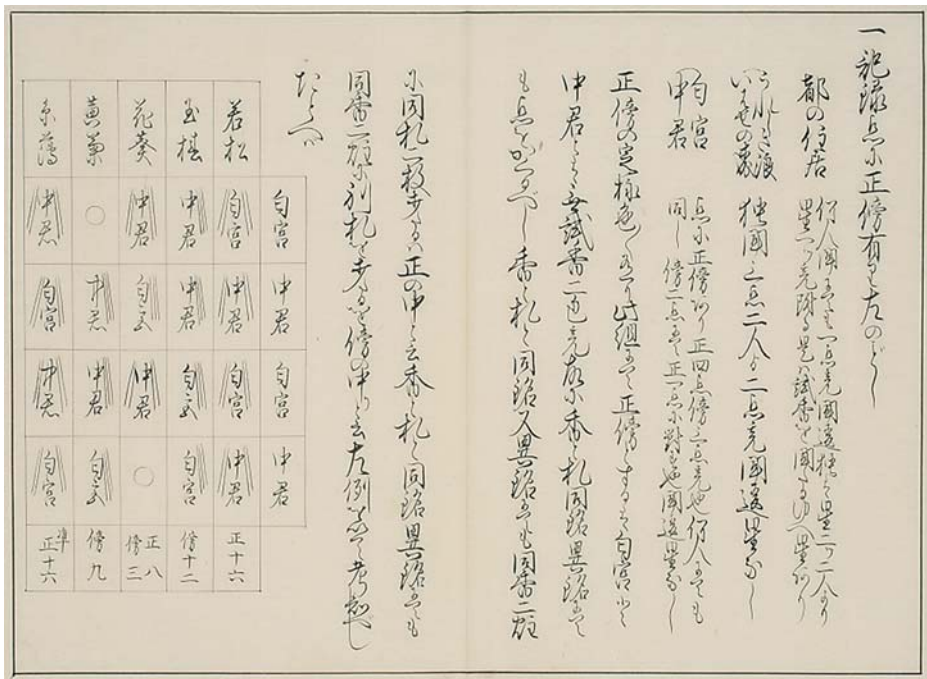
【影印】 綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。

(六十五丁裏)



(六十五丁裏)

(六十六丁表)



(六十六丁裏)

一 國祚九代皆國治て後小坂香の因り際より何香
 ありや國令ヲ入東屋の香の何故目小出さるる國々
 名未低小言出はしり際を香の何故目と徳出は也
 其の何故目たのり

一の香際と國の 志げと澤
 二の香際とゆか ありりりりり
 三の香際と國の 雨ちりりり

一の香際と國の 二条の徳頭
 二の香際とゆか この何人
 三の香際と國の 名未低徳極假令二の香際とゆか

志げと澤 除
 ありりりり 二条の徳頭
 名未

一 龍溪と名香何人とも二点先之際香と一色先り
 隆一香極方小龍は

(七十一丁裏)

(七十一丁裏)

東屋香の絶

名未	志げと澤	ありりりり	二点
名未	志げと澤	ありりりり	二点
名未	この何人	ありりりり	二点
名未	志げと澤	ありりりり	二点
名未	ありりりり	ありりりり	二点
名未	ありりりり	ありりりり	二点

月日

一 董大將り又人吾部卿り又人分り 隆上
 一の香二の香ウの香名也色先初合十二色少又其因
 一 出香一色の因二色出く浮舟名香者其助一色先

一 董大將り又人吾部卿り又人分り 隆上
 一の香二の香ウの香名也色先初合十二色少又其因
 一 出香一色の因二色出く浮舟名香者其助一色先

(七十二丁表)

(七十二丁裏)

